

「な、なんなの、コレ！」

フランソワーズは自分自身を見下ろし、衝撃的な嫌悪感を覚えた。

「……！」

緩やかに巻きつけられた薄いベール越しに隠しようもない豊満な
軀が存在を主張する。流線型を描く美しい乳房の膨らみ、魅了的な
膨らみの真ん中で盛り上がった二つの花芯、優雅にくびれた緩やか
な腰のラインから薄い金色の影を宿した陰部の恥じらいまで、フラ
ンソワーズの魅惑的な軀のすべてが浮かび上がる。

「こ、こんな……っ！」

フランソワーズは無我夢中で軀を両手で覆うと、その場に素早く
しゃがみ込んだ。

「恥らうことはあるまい、我等と同じ軀を持つ『女』よ。美しく、
強靱な心と肉体を持つ者のみ、ここでの存在を許されている。さあ、
堂々と立たれるがよい」

素早く周囲を見渡すと、確かに女しかない。距離を置いて散在
する女性達も、フランソワーズと同じような衣服……いや、薄い布
のようなものを身に纏っている。中には半裸以上に肌を見せて横た
わる女性もいる。

が、目の前にいるのは、どうみても普通の人間ではない。兵士の
ような頑強な鎧をつけ、腰には大きな剣を下けている。顔は鉄のマ
スクで覆われているが……男ではない。マスクの下に見え隠れする
特徴は、女性特有のものだ。

「女同士だからって、こんな……こんな扱いは……」

止めなく襲い来る羞恥心に細い軀を小刻みに震わせ、フランソ
ワーズは潤んだ瞳で抗議する。一刻も早く自身を解放し、元の世界
へ戻してほしいと強く懇願する。

「そなたは『鑑賞品』である。鑑賞品は綺麗に着飾り、身を美しく

保つ義務がある。魅力的な軀を持つ者よ」

「か、鑑賞品って……」

「女王のコレクションに加えられた鑑賞品が古い以外の理由で破棄
されることはない。ましてや、聞けば御身はサイボーグであるとい
う。永遠の美しさを備えたそなたに限っては、歴代の女王にわたっ
て半永久的な恩寵を受けられるであろうよ。老いて恩寵を失い、王
宮を追われる鑑賞品が多い中、なんと幸せな運命であろうか」
「なっ……」

目の前の女兵士がさも当然と言わんばかりに論じる姿を目の当た
りにし、フランソワーズの理性は諤々と音を立てて崩壊する。

一体、この人は何の話をしているのだろう。

鑑賞品？

この場にいるのは、どうみても人間でしかないというのに？

人が人を「物」として扱うなんてありえない。

思考が激しく錯乱する。同時に、しゃがみ込んだ大理石の床の冷
たさが、剥き出しの太腿から全身に広がっていく。背筋が凍え、唇
がわなわなと震えるのが分かる。

自分は一体、どんな数奇な運命に迷い込んでしまったのだろう。
いつものルートを通って街へと向かう途中、黒服の男達によつて
襲撃され、不覚にも吹き付けられた薬によつて意識を失った。

そして、意識を取り戻した今、大理石に覆われた宮殿らしき建物
の中、多数の女性に囲まれて一人、大きなソファの上で横たわって
いる状況に気づく。

ブラックゴースト？

いや、少し違うらしい。

でも、サイボーグである秘密を知っている？

以前、ブラックゴーストによつて捉えられていた時の暗い記憶を

辿る。が、ブラックゴーストにこんな組織は存在しなかった。

男がいない。

「眼」を使って見渡す限り、男が一人もいないのだ。

広い宮殿らしき建物の中には、女しかいない。

「……そんな」

一体、何が起こっているのだろう。

「何を恐れている。女王の誇り高きコレクションの一つとして、御身には有り余るほどの名誉と豊かな暮らしが与えられる。不浄な男のいる世界から守られ、純潔に溢れたアマゾネスの清い地にて何不自由ない余生を美しいまま過ごせるのだ。ほら、見てみる」

——アマゾネス！

フランソワーズの意識が、一つの結論に達して恐怖を掻き乱す。

アマゾネスといえば、ギリシア神話に出てくる、女性だけで構成される部族。高潔な女戦士として歴史に度々登場する。

が、実在していたとは！

アマゾネスは特殊な部族であると言うが、国として存在する訳でもなく、一体何処に隠れ住んでいるのか分からない、あくまで伝説の中に生きる謎深い存在として伝えられているに過ぎない。

いや、存在だった。

実在すると分かった今は。

とすると、女性だけに許された、男子禁制という異常な世界観にも納得がいく。

「選ばれた女の住むこの地へ迎えられた名誉を忘れるでない」

アマゾネスの女戦士が指すのは、周囲の「鑑賞品」……少女から成熟した女性まで、美しいと定義される美貌と肉体を供えた多くの女性達だった。

いずれの女性も同じようなベールを身に纏い、ある者は熟れたフ

ルーツの実を口にし、ある者はクッションを集めたデイ・ベッドの上で長い手足を伸ばしてくつろいでいる。中には鏡を見つめて完璧なほど完璧な化粧の具合を確かめている者もいる。

同じ部屋にいるフランソワーズの様子など気にした風でもなく、何かを考えている風でもない。ただ、感情のない人形のように部屋の中で生きているだけだ。

「一体……彼女達に何をしたの？」

現実を目のあたりにし、恐怖が心の底から沸き出でる。

「極上の絹で縫われたベールが許されるのは、鑑賞品の中でも極上の部類のもののみ。気に召さないようであれば、何か別の衣装を用意させよう。が、眩しいほど美しい裸身を布如きで隠すのは得策ではない。このアマゾネスの王宮では心身の尊さ、美しさが何よりも要求される。その美しさを魅せてこそ、鑑賞品としての御身の価値も上がるというものだ」

フランソワーズの問い掛けに答えることもなく、アマゾネスの中でもリーダーらしい女兵士は赤いマントを翻して足早にその場を去った。未だ床の上にはしゃがみ込んだフランソワーズをその場に残し、女達の甘い嬌声に埋め尽くされた王宮の一室を後にしたのだ。

「嫌、こんな嫌よっ」

鋼鉄の仮面を被った侍女達は申し訳ない程度にフランソワーズの身を隠すベールを丁寧に剥ぎ取ると、目の前の椅子の上に衣装一式を乗せた銀のプレートを置いた。

ギルモア邸を出た時に身に纏っていた自分の服かと期待してみれば、用意されたソレは……ベール以上に露出度の高い衣装……のよ